光と闇の奏鳴曲

菫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光と闇の奏鳴曲

【Ｎコード】
Ｎ２３１９Ｚ

【作者名】
菫

【あらすじ】
全ては“闇”の気まぐれから始まった―　科学が発達した人間の世界に迷い込んでしまったアンパンマン達と、彼らのために奔走するドラえもんズ。しかし事態は最悪な方向へ…。※アンパンマンとドラえもんズのクロスオーバー。苦手な方はご注意ください

Prologue（前書き）

“闇”の独白。読まなくても差し支えはないかもしれません…。

Prologue

.

ゆらり…

“闇”が揺らめいた。

“闇”は一人だった。

いつも、一人だった。

一人で、世界を見渡していた。

だから、“あの子”が羨ましかった。

光の世界に愛されている“あの子”が。

“あの子”が愛している、光の世界が。

…だから、思った。

“あの子”が光の世界からいなくなったら、どうなるんだろう？

例えば、光の世界でも闇の世界でもない処へ、“あの子”が行ってしまったら？

そうなったら…光の世界はどうなる？

“闇”は笑った。

ゆらりと揺らめいて…

to be continued…

Chapitre 1

時は２ＸＸＸ年―

ついに人類は人型ロボットの開発に成功した。
人間に近い姿のロボットは人類初だった。
人型ロボットを開発したのは、日本人だった。
科学の最先端を走る日本は、いち早く全てのロボットの機能やメモリーを人型ロボットに移植することを決定。
―それは、あの猫型ロボット達でさえ、例外ではなかった。

２２世紀の日本と言えど、少し都会を離れれば自然は残っている。
未来的な建物を見下ろす丘の上、ドラミはそこで星と街を眺めていた。
無論、一人ではない。
傍らにはつい最近人型ロボットに意識を移した恋人がいた。
澄んだ空のような青い目と、鮮やかな金髪にカウボーイハットを頭にかぶり、白いＴシャツと袖のないアメリカ国旗を模した上着を羽織り、ジーンズとその上にチャープスと呼ばれる、馬に跨る際にジーンズをプロテクトする履物、それからカウボーイブーツという、ウェスタンスタイルのイケメンと呼ぶに相応しい容姿の青年。
名は、ドラ・ザ・キッド。

兄であるドラえもんの、親友だ。

「うー、夏とは言え寒ぃな。」
「ね。昼間はあんなに暑いのに。」
「でも21世紀に比べりゃ、だいぶマシらしいな。この前ドラえもんの奴、暑ぃ！って愚痴ってきやがったぜ。」

ケラケラと笑いながら話すキッド。
ドラミもつられて笑った。
ちなみにドラミの容姿は、腰まで届く金髪にコントラストの赤いリボン、それからトパーズのように綺麗な目。服装は黄色い襟のセーラー服だ。黄色いニーハイと短いブーツを履いている。

「…っと、そろそろ帰らねーとな。」

キッドが思い出したように、自身の腕に巻かれている時計を見やりながら言った。
人型ロボットになった祝いに、親友たちからプレゼントされたものだ。
親友たちはみな既に人型に移植されていたのだが、キッドは仕事の都合がつかずになかなか時間が取れず、移植の日が延びに延びてしまったのだ。
キッドの仕事はタイムパトロール。
忙しいのも無理はないなと、ドラミは思っていた。
けれどドラミは知らなかった。
キッドが忙しい本当の理由を…。

「…何だ、ありゃ？」

手を繋ぎながら、丘を下りている最中、キッドが空を見上げながら

言った。
キッドの目線の先を、ドラミも見やると。

「…流れ星？」

一筋の線が走っているのが見えた。
流れ星かと思ったが、すぐに違うと気づく。
だってその流れ星は“こちらに向かって真っすぐ落ちてきている”
のだから。

「キ、キッド！」

ドラミはキッドの背後に隠れるようにしがみついた。
キッドもドラミを庇うように、左腕でドラミを下がらせ、空気砲を
右手に装着する。
撃ち落とすつもりなのだと、すぐに分かった。
空気砲を装着した右手を構え、狙いを定める。
…が、

「！？」

キッドは構えた右腕を解いてしまった。
何事かとドラミがキッドの顔を覗き込むと、何やら驚愕しているキ
ッドの表情。
一体、どうしたのか。
落ちてくる何かに向かって、キッドは駆け出した。

「キッド！？」
「ありゃ流れ星じゃねぇ！人だ！」
「ええっ！？」

キッドの発言にドラミは大声をあげてその場で固まってしまった。
何故人が空から落ちてきたのか、そもそも何故キッドは“それ”が人だと分かったのか。
ロボットの視力は人間よりも遥かに性能がいいが、ドラミでも分からなかった正体に、何故キッドは気づけたのだろう。
…今はそれ処ではない、とドラミは一旦それらの疑問を頭の隅に追いやった。
キッドが人だと言ったものは、もうすぐそこまで落ちてきている。
どうしよう、キッドはどうするつもりなのか。
受け止めるのは無理だろう。
ロボットと言えど、かなりのスピードで落下してきた人を受け止めれば、無事では済まない。
するとキッドは身に着けていたカウボーイハットを手に取り、帽子の中に手を突っ込んだ。
ドラミやドラえもんのポケットと同じ効果を持っている、四次元ハット。
取り出したのは…。

「おらっ！！」

“マット”だった。
とびきり大きいマット。
これなら落ちてくる人を受け止められるし、怪我をすることもない。
２２世紀の科学力がたくさん詰まったマットは、衝撃を受けた瞬間にそれを吸収するので、受け止めても大きく沈むことはない。
果たして落ちてきた人は、キッドの狙い通りの場所に落下した。

「っし！」

小さくガッツポーズをしたキッドは、軽い身のこなしでマットに飛び乗る―（マットは優にキッドの身長を越していた）。

「おい、大丈夫か！？」

マットのほぼ真ん中に落ちた人のもとへ駆け寄るキッド。
ぐったりとうつ伏せに倒れている人物を仰向けにし、上半身を起こすように抱きかかえた。
それは、少年だった。
歳は人型ロボットとしてキッドの設定されている年齢より２つか３つ年下と言ったところか。
ドラミの設定年齢よりは年上に見える。
つまりキッドとドラミの間ぐらい。
薄い茶色の髪は左側の顔の横にある一房だけ長かった。
目はかたく閉ざされてしまっているため、分からない。
何より変わっているのは、その少年の服装だった。
赤を基調とし、所々に黄色がコントラストされている。
上は口の広い襟と袖の短い、真ん中に黄色く細いラインが走っているシャツ。
左胸には可愛らしいスマイルフェイスのマークが施され、手には茶色い紐で固定されている黄色いグローブがはめられていた。
ウェストは黄色いベルトと、下はキッドと同じ、赤いジーンズとジーンズよりも暗い赤のチャープス、それから膝下までの黄色い折り返しのロングブーツを履いていた。
そして…黄色い金具で留められた茶色いマント。

（…何だ、こいつ？）

助けたのはいいが、よくよく見れば風変わりな格好をしていた。
２２世紀とは言え、人々の服装は２１世紀のものとさほど変わって

いない。
この少年は一体何者なのか…。
「よいしょ…キッドー？」
ドラミの声でキッドは、ハッと我に返った。
後ろを振り返れば、ドラミがタケコプターを使ってマットの上に登ったところだった―（マットの高さはドラミの身長を優に超えていた）。
「どうしたの？」
歩きにくそうにキッドの傍まで来ると、キッドが抱きかかえている少年を見やった。
目は閉じているが、なかなかカッコイイ少年だった。
思わず見とれてしまったが、そんなことをしている場合ではないとすぐに頭を振った。
「キッド、うちに連れて行こう？」
「え？大丈夫なのか？」
キッドが驚いたようにドラミを見上げた―（キッドはしゃがんでいて、ドラミは立っているため）。
ドラミは大丈夫、と笑った。
「今日からセワシさん達、旅行なの。それに、困っている人を放っておくなんて、それこそセワシさんに怒られちゃうわ。」
「…だな。」
何度かセワシに会っているが、先祖ののび太と同じで優しく思いや

りのある子だ。
事情を話せば、セワシの両親だって分かってくれるだろう。
キッドは苦笑すると、少年を背負い、マットから飛び降りた。
ドラミにマットを仕舞ってもらい、少年を背負ったまま走る。
少年は、まだ目を覚まさない。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

Chapitre 1（後書き）

しばらくドラズ中心のお話になります。
擬人化していますので、苦手な方はご注意ください。

Chapitre 2

今日はサッカーの練習試合がある。
ブラジルの名門チームに所属しているドラリーニョは、ボールを蹴り上げながら試合会場に向かっていた。
人が多い路地を、誰にもぶつからずに、しかもサッカーボールを操りながら走っているドラリーニョ。
流石としか言いようがない。
ふ、とドラリーニョは足をとめた。
横目でガラスに映る自分が見えたからだ。
キッドより少し前に人型ロボットに移植された、自分。
黄緑色の髪はぼさぼさしていて、赤いカチューシャで前髪をあげている。
顔には髭を模したペイント、目は鮮やかなエメラルドグリーン。
服は面倒なので、自分が所属しているチームのユニフォームをいつも来ていた。
容姿以外は、あまり変わっていないのだ。
不満があるとすれば、身長が低いことだろう。
他のドラえもんズは１７０を優に超えているのに、自分は１６０あるかないかだ。
ドラニコフなんかは１８０ある。
年齢設定だって、他のドラズよりも低めである。
同じ年に作られ、同じ年に卒業したのに、とドラリーニョはむくれた。
他の大事なことはすぐに忘れてしまうのに、こういうことは覚えて

いるのだな、とドラメッドがいたら苦笑されそうだ。
…と、そんなことを考えている場合ではない。
早いところ会場にいかなければ、またチームメイトに怒られる。
ドラリーニョはボールを仕舞うと、大きく息を吸った。
そして…。
ヒュ、と風が吹いた。
次の瞬間、ドラリーニョの姿はそこから消えていた。

集合時間ギリギリでグラウンドに着いたドラリーニョは、ふとチームメイトの様子がおかしいと気づいた。
いつもなら練習を始めているのに、彼らはグラウンドの中央に集まって困ったような顔をしている。
どうしたのだろうか、とドラリーニョはリュックを無造作に放り投げ、チームメイトのもとへ駆け寄る。

「どうしたのー？」
「あ、ドラリーニョ…。」

チームメイトの一人がドラリーニョに気づいた。
やはり困ったような顔をしている。

「何かあったの？」
「いやさー…。」

あれ、と言ってチームメイトは指を差した。
チームメイトが困ったような表情をしている原因。
それは、

「…人？」

人、だった。
仰向けに倒れこんでいる、少年。
一見すると少女のような顔つきだったが、体つきはよく見れば男のそれだ。
白い髪は長く、紺色のリボンで纏められている。
それはいいのだが、変わっているのだ、服装が。
王子様のような、白く襟がたった、袖の長い燕尾服のような上着。
上着には左右に三つずつ金色のボタンと、そのボタンを繋ぐ金色の紐。
首元には淡い水色のスカーフが顔を出していた。
手には赤いグローブ。
上着の下には灰色のベストを、赤いベルトで留めている。
白いズボンを、赤いロングブーツの中に入れていた。
そして、ボタンで肩に留められている、白いマント。

「…。」
「おい、見ろよ。流石のリーニョも言葉失くしてるぜ。」

チームメイトの一人が、珍しいドラリーニョの姿に驚いている。
滅多なことでは動じないドラリーニョが、この倒れている少年を前に言葉を失くしているのだから、無理もないだろう。

「でもどうする？」
「監督が来る前に何とかしないと…。」

チームメイトが少年をどうしようかと相談し合っている時、ドラリーニョは徐に、少年に近付き、跪いた。

整った顔立ちをしているが、何処か顔色が悪い。
怪我でもしているのだろうか。
軽くゆすってみたら、少年はますます眉をひそめてしまった。
―ドラリーニョは、決意した。

「連れて帰る。」
「は？」
「ボク、この子連れて帰るよ。」

ニコッ、と屈託のない笑顔を浮かべ、チームメイトに言い放ったドラリーニョ。
チームメイトは何を言っているんだという表情だった。
時々訳のわからないことを言い出すドラリーニョだったが、こうなると梃子でも動かないこともよく分かっていた。
白い少年を背負って、今にも走り出そうとしているドラリーニョを見て、チームメイトは深い溜息をついた。

「あーもう、監督には俺らが言っておくから、行ってこい。」
「うん！」

チームメイトに見送られ、ドラリーニョは少年を背負ったまま、会場を後にした。

「…あれ、あいつリュック…。」
「あ。」

to be continued...

Chapitre 3（前書き）

まだ名前は出ませんが、アンパンサイドのキャラがキャラ崩壊しています。
ピンと来た方はご注意ください。

Chapitre 3

.

茜色に染まった空を見て、エル・マタドーラは何となく黄昏たい気分になった。
夕方というのは、人の気持ちを切なくさせる効果がある、と誰かが言っていたが、それはロボットも同じだったらしい。
ふ、と夕日で伸びた自分の影を見やった。
そして、鬱陶しく肩まで伸びている、鮮やかな紅い髪に手を伸ばす。
線の細い髪はまるで女のような手触りだ、と喧嘩友達の王ドラに笑われたことがあった。
身につけている着衣は以前の、ネコ型ロボットだった時と同じような、紫のマタドール服と、同じ色のモンテラと呼ばれる闘牛士用の帽子。
白いスカーフとレースがついた白い服も、マタドーラには似合っていた。
今日はもうバイトも終わったし、家に帰ろうとした時のこと。

「…。」

ピリッとした空気が、辺りを包んだ。
殺気だ、とマタドーラはすぐに分かった。
辺りには誰もいない。
が、気配は感じる。
この姿になって、気配にも敏感になったようだな、なんて暢気なことを考えている場合ではない。
マタドーラは気配に気づいたと、気付かれないように、再び歩き出

した。
一定の距離を保って、気配はマタドーラについてくる。
「…。」
鬱陶しい、とマタドーラは溜息をついた。
ついてくるぐらいなら、飛びかかってくればいいのに、と喧嘩っ早いマタドーラらしいことを考え、何気なくしゃがむと、徐に石を拾いあげると、気配に向かって投げつけた。
ドラえもんズ一の力持ちを自負するマタドーラが投げた石。
普通の人やロボットなら一たまりもないだろう。
だが、気配はマタドーラの投げた石を受け止めたどころか、投げ返した。
「っ！」
流石に驚いたマタドーラだったが、彼が投げた石の威力に比べれば、投げ返された石は止まっているようにも見える。
マタドーラは片手で石を受け止めると、キッと睨みつけた。
「…誰だが知らないが、出てきな。そんな殺気のこもった気配を隠しもせずについてくるたぁ…いい度胸してんじゃねぇか。」
低い声で気配に脅しをかけた。
だが、気配は怯むこともなく、それどころか更なる殺気を込めて、マタドーラを飲み込もうとしていた。
「…チッ。」
マタドーラは苦々しげに舌打ちをすると、四次元ポケットから愛用

のヒラリマントと、闘牛用の細長い剣を構えた。
「だったらそこから引きずり出してやらぁ！！」
そう叫ぶや否や、マタドーラは気配に向かって走り出した。
闘牛用の剣を逆手に持ち、建物の影に突き刺そうとした…。
が…。

ヒュッ！

空気を裂くような音がした。
そして黄色い陰が飛び出してきた。
飛ぶようにマタドーラの上を通り過ぎると、少し離れたところで着地した。

「…テメェ。」

マタドーラは黄色い陰を睨みつけた。
徐に顔をあげた黄色い陰に、マタドーラは目を見開いた。
少年、だった。
マタドーラの年齢設定と、同じくらいの歳の少年。
茶色い髪は重力に逆らって上に向かっている。
オレンジの上下一体の作業服は上だけファスナーがついていて、その周りだけ黄色い。
左側の襟にはほっぺたが引っ張られたような顔のマーク
指なしのグローブも黄色だった。
腰辺りには太さが違う白いベルトが装着されていた。
ブーツはオレンジや黄色の迷彩柄の布が被せられた黄色いブーツ。
黄色いマントは、右肩で大きなボタンで留められている。
そして…少年の黄色い目を見て、マタドーラはぞっとした。

―冷たい

まるで何も考えていないような、何も感じていないような…この世界にまるで興味がないような、目。

とにかくこの年頃の少年がするような目ではなかった。

「…何なんだ、テメェは。」

「…。」

震える身体を叱咤し、マタドーラは少年に問いかけるが、少年は何も答えない。

マタドーラの紅い目と、少年の黄色い目が空中でぶつかる。

じり、とマタドーラは地面の砂を踏みつけた。

―どれくらい時間が経っただろう。

最初に動いたのはマタドーラだった。

少年に向かって走り出すと、闘牛用の剣を思い切り真横に振る。

だが、少年は後ろに仰け反るようにそれを躱し、さらにむき出しになっている鉄パイプを目にすると、それを掴んで、根元を蹴ってパイプを折り、慣れた手つきでクルリと上下を逆さまにした。

そうすることによって持ち手が短くなり、剣のような武器になる。

…蹴られたせいで歪んだ鉄の先を、マタドーラに向けた。

まるで挑発するかのように。

「っ！上等だ！」

カッと頭に血が上ったマタドーラはヒラリマントをかなぐり捨てると、再び少年に向かって走り出した。

闘牛用の剣を思い切り振りかぶって、少年に振り下ろそうとした時。

突然少年はばったりと倒れこんでしまった。

「…あ？」

マタドーラは突如少年が視界から消えてしまったことで動揺してしまい、思わず動きを止めたが、すぐに少年が倒れたのだと気づいた。

「お…おい！？」

慌ててしゃがむと、少年の息が荒いことに気づいた。
顔が、青白い。
それに…

「…血の、匂い？」

鉄くさい匂いがした。
最初は少年が叩き折った鉄パイプの匂いかと思ったが、違った。
じわり、とオレンジの服が血で赤く染まっている。
左腕を怪我していたらしい。

「…ったく。」

怪我をしているのに、と思ったが、そのせいかと同時に思った。
手負いの獣と同じだ。
怪我をした獣は凶暴化する。
この少年の目つきが鋭く冷たかったのも、怪我のせいで用心深くなっていたからだろう。

―どうしたものか。

マタドーラの考えは決まっていた。

「よっ、と。」

マタドーラは少年を軽々と肩に担ぎあげると、自分の家に向かって歩き出した。

いきなり襲われたが、どうしてもこの少年を放っておけなかったのだ。

「…俺らドラえもんズは、お人好し集団の一員だからな。」

そう言い放ったマタドーラの表情は、どこか悲しげだった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2319z/

光と闇の奏鳴曲

2011年12月11日18時50分発行